

神様転生IFストーリー

破邪矢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生にをネタにした話を纏めました。

目次

そしてロリコンは神になった

ロリコン死す

1

ロリコン宣戦布告

8

そしてロリコンは神になる

13

今日もまた人が死ぬ

夢の中

27

そしてロリコンは神になった ロリコン死す

俺はロリコンである

中学校でロリコンに目覚め

コミックL○を聖書とし

『Yesロリータ、Noタッチ』を座右の銘にし

ロリ成分の不足する高校を中退し

近所の銭湯に就職し

仕事のない日は緑のお兄さんとして精力的に活動していたくらいにはロリコンである

そんな俺の現在の仕事は

ネ申

次に記す物語

何故俺が神になったのかの経緯と

神になった後のお話である

いつものように銭湯の掃除を終え帰路についた日曜日の昼下がり 小学校近くの公園で 幼女^{女神}とその他クソガキが仲良くドッジボールをして遊んでいる
地面に書かれた四角の中をキャツキャ キャツキャと言いながらロリ^{妖精}たちが舞い踊りボールを避けていく

「見えそうで……見えねえ」

「あれゝ おっさんいたの」

「うるせえクソガキ お兄さんと言え お兄さんと」

「あッ おじちゃんいたんだ バイバゝイ」

「(いろいろ訂正したいが カワイイから許すッ!!) 怪我しないようにしろよー じゃあね」

近頃子供の外遊び離れが騒がれているが われらロリコンにとつてもゆゆしき事態である ベンチに座り彼女たちを見守りながら チラリズムや汗ばむ肌に思いをさせる あの至福の時間が無くなるのは何とも耐え難い

そんな杞憂であってほしい悩みを抱えながら家に歩を進めると 公園のフェンスを一つのボールが飛び越えた

「元氣すぎるのも悩みものだな 拾いに行くか」

人として困っている人は見過ごせない なおかつ 運が良ければ「ありがと！ おにいちやん♪」と言ってもらえるかもしれないチャンスはロリコンとして見過ごせない 善意よりも下心で拾い振り返ると 一人の女の子が^{天使}ボールを探しているのか公園の入り口でキョロキョロとしている

「ボールはここだよー」

お目当てのものを見つけた少女は目をキラキラと光輝かせ 脇目も降らずに

道路に飛び出した

しかも道路には

4tトラックが走っていた

「危ないツツツ!!」

ボールを放り投げ少女の元に駆け出す

その間の時間はほんの5秒にも満たないだろうが 俺には十倍にも百倍にも感じられた

走っている間に着いてたパーカーを脱ぎ 僅かばかりでものクッションの効果を

期待しかぶせたが 迫るトラックを見て何の意味もないことを本能的に理解した
ならば

曲がりなりにも日々の労働で鍛えた筋肉を総動員し 彼女を道路脇の生垣に投げ入
れ……

その直後に低い放物線を描き地面に叩きつけられた

「ガッ………エハッ!!」

黒いアスファルトが血で赤く塗り替えられていく光景が目映る

全身に釘でも打たれたような痛みに叫ぼうとしたが 落下時点の衝撃で肺はつぶれ
声は出ず

辛うじて無事だった耳に少女の泣き声が入り生きていたことに安堵した
そして俺はなすすべもなく死んでいった

——そこで俺の人生は終わるはずだった

「……きろ 起きなさい 君」

ああ なんだ? 誰かの声がする

重いまぶたを開け見渡すと そこは白に囲まれた空間が広がっていた

「知らない天zy……いや部屋？ 空間？ 何処だ此処？」

確か私は死んだはず だよな？ あの状況で生き残るとは考えにくいし

「ひよつとすると天国……にしては殺風景だな」

だとするとあれか 今の俺は一命は取り止めてが植物状態で夢の中なのか？

「でもそしたらさっきの声は……」

「後ろを見る 君」

「ハイ？」

振り返ると 白装束を身にまとった如何にもな人がいた

「もしかして……切腹して死にました？」

「違うわッ!! 介錯されそうな人間に見えるのか儂が」

何だ違うのか 俺以外の人がいるってことはここは死後の世界ってことなのか

「いや でも 恰好からすればそのようには見えますけど」

「黙れい!! いいかお主 心して聞けよ」

「そんなに口開けたら入れ歯が落ちますよ 落ち着いて話してください それにこの距

離でそんな大声を出さなくてもいいでしょうよ」

「五月蠅いわッ!! 神様を馬鹿にするのもいい加減にしろ」

何だこの爺さん全く ちよつとふざけただけなのに

イヤちよつと待て今この爺さん

「何て言いました」

「神を馬鹿にするなど言ったんだ」

「髪？ 確かに頭は輝いてますけど」

「ネ申じや 英語で『God』」

「そうですか では」

そうか神様だったのか道理で面倒くさい性格をしているわけだ

「帰ろうとするなあああ」

まだ何か言ってるし

「儂 神じゃぞ神 普通もつと敬意を払ったり崇めたりするもんじやろ」

そんな事を言われても

「だって私

ロリータ教だし

聖書はコミックL〇だし

神（女神）は幼女だし

天使は女の子だし

妖精はロリだし

座右の銘は『Yesロリータ、Noタッチ』だもん」

どうだ言ってやったぜ 前にもどつかの新興宗教だとかなんだとかの勧誘をこれで断ったけど その後は一切来なくなつたな

その直後に警察が来て5時間ほど話したのは本当に疲れたが……

こっちは Noタッチ Noタッチと言っているのに犯罪者を見る目でガン見ド
ン引きされたし

国家権力許さまじ

「そうだとっても儂が神なの 君たちの命は俺が管理してるの!! とりあえず話を聞
け」

「解りましたよ 聞くだけ聞きますよ ただ簡潔にお願いします」

「分かった簡潔に言おう」

最初からそうすればいいのに

「君は死ぬ予定じゃなかった 間違えて死んでしまったんだ」

ああそうですかなるほど……ハアツツツ!?

ロリコン宣戦布告

前回のあらすじ

ロリコンが神様のミスで死んだよ♪

「幾つか質問してもいいか」

「なんじゃ急に改まって 良いぞ何でも聞け」

「具体的にどんなミスをして死んだんだ？ イヤ それよりそもそも人間の運命は決まっているもんなのか？」

先ほどとはまるで別人のように 質問を続けるロリコン

「落ち着け 順番に説明するから」

「・・・分かった」

「コホン まず僕は君たち人間の命の管理をしている」

声色を少しまじめで神っぽい感じに話し出す神

「そして 管理しているのは君たちが」 一つ生まれるか “
“ どれだけ生きるか “
“
次は何にするのか” の3つだけじゃ」

「つまり誕生日と寿命と来世か」

「そういう事になるな 基本的にその3つは一回決めといたらほとんどそうなるんだが・・・」

「例外がある?」

「希にだが上手く行かないことがあるんじゃない? はぐれ原子の平方根の法則じゃない」

「はぐれ原子? ナニソレ知らない」

「俺が死んだのはそれが原因・・・」

「ではない」

「違うんかい!!」

「じゃあなんで俺は死んだんだよ」

「若干の苛立ちを含んだ質問をするロリコン」

「トラック運転手に憑依して遊んでたら轢いちまった」

「・・・・・・はあ??」

「いやァゝ 久しぶりにマニユアル運転したらやり方忘れちゃって ブレーキ踏む気だったんだけどアクセルふかしちゃった」

「予想外すぎる理由に言葉が出てこないロリコン」

「僕も悪かったとは思っている だからお詫びと言っては何だが・・・」

「甦らしてくれんのか？」

「それは無理だか 3つの願いと好きな世界に行かせてやる」

「俗に言う転生か」

「そうじゃ どこでもよいぞ」

「少し考えさせてくれ：：」

（10分後）

ロリコンは真剣な顔で神の元へ歩みを進めた

「決まったか」

「ああ ただ最後に一つだけ質問がある」

「何でもよいぞ 聞いてみせなさい」

「あの事故はお前が関わらなければ起きなかった事故なんだよな？」

「だろうな 信号赤だったし」

「分かった」

ロリコンは願いを伝えた

「俺がかなえてほしい願いは

①ありとあらゆることで範馬勇次郎の100倍の性能を持つ体と

②物理的な力をありとあらゆる事・物に干渉させる能力だ」

「二つで良いのか？」

「三つ目もあるが先にこれを叶えてくれ」

「分かった」

一瞬にして全身が光に包まれ その光がゆっくり消えると

まず同一人物とは思われないような 筋肉刃^{バツ}ツ牙^キ 刃牙^{バキ}の姿になっていた

「姿はそれで良いのか？」

「ああ 最後の願いを言う前に言っておく」

「なんじゃ？」

「俺は転生をしない」

「……それはd「そして俺の三番目の願いは

③お前と「命の管理する力」を賭けて殺し合いをすることだ」

「……そんな願いを俺が叶えると思うか」

「無論 そんな訳無いと思ったよ だからこそその①と②だああああ〜」

ロリコンは神の事を思いつきりぶん殴った

そしてロリコンは神になる

前回までのあらすじ

ロリコンが転生を断って神に宣戦布告したよ♪

①ありとあらゆることで範馬勇次郎の100倍の性能を持つ体

②物理的な力がありとあらゆる事・物に干渉させる能力

この二つの能力にフル活用し神をぶん殴ったロリコン

「待て！ちよつと待てお主 何で儂を殴った!!」

「理由が思いつかないなら思いつくまで殴るぞ」

「そんな事言われも」「フンッ!!!」「ゴボア……!」

ならば死ぬとでも言うように再び神を殴る

「あれか？ 残した家族に未練でもあったか？」

「違う!」

メシヤッ

脇腹を左足で蹴り 横に薙ぎ払う

「死んだときの苦痛を思い知れと？」

「そんな事じゃない！」

ボゴツ

頭頂部に裏拳をかます

「何が不満か知らんが 此れしきでは儼は死なんぞ」

「ならば遠慮は要らないなッ」

バアギイ ヲエゴ メシヤ ブヂエ ヲアヂヤ ボオギ ボゴウ ミヂ メエギ

ガシユツ メリヨ バオギ ビエギヨ ベエキ ビチツ ヲイゴウ バキツ

メキヨ メシヤ ブヂツ ヲエキ ボオゴ ミジユ グリユ ガシユツ メ

リヨ バギユ ビエギヨ ベキ ビジイ ヲイゴ バアコ メギヨ ドウゴツ

ブヂヤ ヲアギヤ ドウゴツ メリ メシヤ ブウチ ボキイ ボゴ ミシ

ガシユツ デュヂヤ バアギツ バエゴ ミジユ ミギイ ブヂヤ メギヤ ミ

キヨ メジヤ ブチツ ボキ ボエゴ ミヂツ ベグオ ヲイキイミキユ

ヲエギヨ バキツ メキヨ メシヤ ブチユ ボオゴ ブツチ ボキ ミチ

バウギ ガシユツ ヲイギユ ミイチャ ベギイ メリユ バアギ ビエギヨ ベキ

メエギヨ ビヂイ メシヤ ブチ ボゴ ヲイヂ ボイキ ブヂイ ボゴ ヲア

ギオ ミエシ ミキヨ ブチ ヲエギイ バキツ メキヨ ヲエシヤ ミシ ブエ

キイ ガシユツ ビゴン ビギイ バギ ビエギヨ ベイギ ビイヂ ヴイゴ バイ
 コウ メキヨ ヴアギヤ ドエゴ メリイ ボギ ドウゴツ ミヂユ ベエギ ヴイ
 ゴウ バアギイ

百を超える無呼吸連打 しかしそれを全て受けて尚 神が死ぬような気配はない

「理由は思い浮かんだか」

「何の事だか分からんな」

「そうか……なら仕方が無い」

そう言うのとロリコンは 体をほぼ真後ろへ捻り まるで遠投や砲丸投げのように構

え

「握力体重×スピード＝破壊力!!」
あくりよくたいじゆう はかいりよく

殴った

放物線を見視するかのよう ほぼ一直線に吹き飛ぶ神

「思いついたか あんたが殴られる理由は」

「なにが不満か知らんが……お主タダで済むと思つとるのか」

「何をするのか知らんが……自分でどんな力を与えたか覚えてないのか?」

「そこまでボケて無いわ じゃがのう」

「…」

「与えた力を取り上げることが 儼に出来ないと思ったのか!!!」

神は与えた力を奪い返さんとロリコンに腕を突き出す…が しかし

「なに……!!」

体内に透過し力を奪い去る予定だった腕は 筋肉に……いやそれは筋肉という単語で表せるものではなかった たとえるならば壁…鉄板…そんな柔^{ヤウ}な物では無く それ以上に硬く…重い——巨岩

見上げてても その高さを知ることのできない大きさを持つ「不動の巨岩」そうとも言うべきモノそれに阻まれたのだ

「分かったか? 今の俺の体はお前が思っていたものより 遙に固く 遙に丈夫で…強い」

「クソツ」

神は悔しそうに顔を歪めた

自らが与えた力 その力に阻まれ取り返すことが出来ない これほどまでの屈辱があるだろうか

「まだやるかい?」

「…」

神は答えない

「今 負けを認めるならば俺もこれ以上攻撃はしない 約束しよう だが!! 負けを認めずに逃げたなら……キサマが死ぬまで追いかけまわす」

此の時 神は別次元に逃げたり ロリコンを強制的に転生させることが出来なくては無かった

だが 確信といえるほどの直感がそれを無駄だと判断した この男にそんな事は通用しない その肉体から発せられる剛力をもつて 次元の壁すら破ってくるそう思ったのだ

「もうええ……分かった儂の負けじゃよ 自らが蒔いた種じゃ責任は取ろう だが最後に教えてくれ 何故転生の権利を捨て儂に戦いを挑んだ?」

「一言で表すなら『俺がロリコンだから』」

「イヤ 分からね」

「俺が死んだのは……トラックに轢かれたからで その事故の原因はアンタだ」

「そうだな」

「だから死んでしまった俺にお詫びしたのは分かる」

「偉いじゃろ」

「だが……あの事故で一番アンタが謝罪すべきなのは俺じゃない 俺が助けた幼女だ」

「何故じゃ? あの娘は生きておるし大した怪我もしと r | ボゴ | ゲエボウ……!」

さつき殴らないって言ったじゃろお主イ」

「言葉より先に拳が出た すまんな だがこれが俺の意志だ」

「だからどういう事なんじゃ!!!」

「いいか? 確かにあの事故で少女は死んでない でもなあ もしあの子が自分のせいで俺が死んだと考えたら? あの事故がトラウマになって外に出られなくなったら? 疫病神なんてあだ名がついて学校でいじめられたら? 軽い怪我で済んでなかったら? 他にも色々あるがそれらが原因で彼女の未来が暗く悲しいものになったら? その責任を誰がとる? 事故の原因であるお前しかないだろう?」

「それは別に儂の仕事じゃ……」

「何言ってるんだ 生きとし生けるもの少女を保護するのは義務だ 仕事じゃない」

神は確信した

(こやつ……ヤバイ奴じゃ)

「少女を大切にするのは当たり前前的事だろ もし仮に俺が生き残って同じような状況になっていたら また同じように助けに向かう」

「随分と立派な心掛けじゃな」

「だが 俺がどれだけ騒いだところで キサマがその責任を取るとは限らないし 今後同じような事が起こるかもしれない その可能性は一人のロリコンとして見逃せない」

「……考えすぎではないか」

神の意見は最も「いやそれ以前にロリコンの考えがおかしいのだろう　だが

「何がおかしい？　それに　俺がやろうとしていることは基本的に善行だ　善い行いをやめる理由がどこにある？」

彼の信念は変わらない　恐らく止めることは物理的にも出来ないだろう

「それに　俺が神になれば不幸な人生を歩む幼女を減らせる　これ以上に素晴らしい事は無いだろう」

「……分かった　お主に儂の力を譲渡しよう　主神よ我の声が聞こえるか？」

「ん？」

神が上に向かって語り掛けると　空間が光に包まれ――光が消え去ると宮殿のような建物の内部のにいた

「なんだ（ん）？」

「主神……神の管理をする神の部屋だ　儂の力をお前に渡すことはこの者でなくては出来ない」

「転生特典は授けられるの？」

「儂の仕事は人間の管理であって　他の神が司る仕事は出来ないのじゃよ」

「私を呼んだのはお前か」

空中からゆつくりと降りてくる 見事な白髪と髭を蓄えた主神

「分かつとるくせに白々しい 何じやこの空間はいつもは殺風景なくせに 人間がいるからと豪華にしおつて」

「何だばれたか」

主神が指を鳴らすと景色が一瞬で変化し 応接室のような空間が出現した

「立ち話じや疲れるからな 掛けよ」

促されるままにソファーに腰かけ 出されたお茶をすする

「話は分かった 望み通り君を神にしてやろう」

「良いのか？ そんな簡単に」

「早い話 働いてくれるならこちらとしても有り難いんじや 人間部門は数が足りずにてんでこ舞いでな」

「お主には話して無かったが……儂以外にも人間の管理をする神はいる」

「マジで？」

「マジもマジじや お主は儂がこつちに招いたから来れたが普通は無い 稀に死んだ人間や霊能力者がこちらの世界に来ることがあつてな そう奴らを片っ端から人間担当の神にしてた」

あまり聞きたくなかった まるで企業のような運営形態のシビアな神様事情である

「まあ そうゆう訳だから 仕事頼んだ」

「ちよつと待て ところでこのハゲはどうなる？ 俺としては事故の時の少女の事で落とし前付けさせたいんですけど」

「あゝ そうじゃのう きみの主張も全く分からない訳では無いんじやが……人間部門から減らすわけにもいかんからなあ…… そうじや！ 君の部下にしたまえ」

「俺の部下になるんですか このハゲ」

「何かと使えると思うぞ 古参じやから他の神にも顔がきくしな」

「人を便利なアイテムのように話すな 全く」

「お前が蒔いた種だろ 自分でも言ってたじゃないか」

「はあ…… 先が思いやられる……」

その後ロリコンは 思ったより多い仕事や死にたくても死ねない神様システムに苦しめられながらも 日々少女の苦難の無い幸せな生活の実現のため奔走した

以上が俺が神になった理由 そしてここからが後日談だ

俺は人間部門から派生した（させられた）――『幼女保護部門』その主任になっていた

「ある程度の予想はしておったが……50%の人口増加とはのう」

「幼女保護して 戦争けしかける国家元首とか凶悪犯罪者とか減らしまくったからなあ
そりゃそうなるよな」

俺が神になり僅か数十年 ありとあらゆる世界で幼女を保護しまくった その結果
ほとんどの世界で人口が増加した

「まさか 俺のいた世界で物語だった世界の管理までするとは……」

「農らが管理して無かったら 転生できる訳無いじゃろ」

「そうなんだけどさあゝ 一日100時間労働ってなんだよ とんだブラック企業じゃ
ねえか……」

「産業革命の時よりましじゃ……あの時は農一人じやったからな ワットの糞野郎が」

はるか遠くを見つめながら愚痴るハゲ

「俺としてはアイツがいないと 子供は「小さな大人」として労働力のままだったからな

感謝しているぞジェームズ・ワット」

「今はそれ以上にお主が憎いがな 業務時間外に色々仕事をさせおつて」

「え？何だつて？」

「ハア もうよい どれでどうする？」

「『どうする？』とは？」

「お主の最初の望み通り 不幸な人生を歩む幼女は居なくなつたが その代わり人口が劇的に増えた 何が問題かは分かるよな」

「……どう考えても人手が足りないか」

「おかげで農らのミスも増えて 転生候補も増えたが……お前のような物好きは 一人もいなかったぞ」

どうしようかねえ 何かいい案が—— あ そうだ!!

「ハゲ お前幼女になれよ」

「遂に壊れたかお主……いや 前からか」

何故だろう？ いつぞやの警察官にとてもよく似た目で見られた

「そうじゃなくて 俺みたいにトラックの前にロリがいれば 善人は皆助けに向かうだろう？」

「善人っちゅうか 只のロリコンじゃろ」

「まあまあ落ち着け 取りあえず俺のやった事の疑似体験を 丁度寿命が尽きるような人間にやらせて こっちに引き込んで 全員神にすればいい」

「上手く行くかのう」

「一定数は確保できるだろ」

「数日後」

合計2万人近く集まりました

「マジか!!」

「マジじゃ 軽く脳内覗いてみたが……全員重度のロリコンじゃった お主もじゃが命が惜しくないんか?」

「愛するロリの為なら死ねるぜ」 キリッ

「分からんのう まあ良い お主が発案者なんじゃから説明はお主がしろ」

俺は覚悟を決めて かつての俺と同じ選択をした同志の前に立つ

「どうも皆さんこんにちは 私が神です」

いたるところからざわめきが聞こえる そりやそうだろう ラノベやSSならいかにもな爺さんか可愛い女神が出てくるものだ

ただ 残念なことに俺の見た目はそうではない ボディービルダーとは比べ物にならない肉体の青年である

「君たちがここにいるのは 俗にいう『トラック転生』……ではないんだ」

「嘘だろ!!」

「ロウきゅーぶ!の世界に行こうと思ってたのに」

「ワイもや……」

「下手に希望を持たせてしまつて済まない だが案ずるな! 君たちは転生以上に素晴らしいことが待っている!」

全員が俺の次の発言を固唾を飲んで待つ

「我らが天使……幼女を守護する神となれ!!! 清く尊いロリたちを! 君たちの手で守るんだ!」

同志達がどよめく

「無論楽な仕事ではない……だが! 仕事の過程であらゆる世界のロリに会える!

国も 世界も 人種も 次元すらも超え ありとあらゆるロリに会える!」

「拙者の嫁である 獣系ロリも?」

「会える!」

「僕が考えたオリキャラの巨乳ロリ嫁も?」

「会える!」

同志達の熱狂が最高潮に達した

「君たちは選択したんだ 自らの命を天秤にかけて 幼女の！ ロリの！ 女の子の！
命を救うことを!!! 神になることはそのご褒美だとも考えてくれ！ かつての私
もそうだった だがその選択に後悔は無い!!!」

「そうだ」

「後悔なんざ微塵もねえ」

皆の意志が一つになった

「同志達よ 神の世界にようこそ」

その後 一気に人材が増えた神の世界では 全ての業務が滞りなく行われ 神様の
ミスによる転生は無くなった

今日もまた人が死ぬ

夢の中

「前沢さん　ちよつと多いけどこの資料片づけて」

「はい分かりました」

三桁を超える全てのページに余白の存在を許さないかのように文字とグラフが蒔き散らされている。一体これの何処がちよつとなのか凡人の私には理解が出来ない。

私の職場は俗に言うブラック企業だ、毎日の残業に休日返上は当たり前。だが私はそこまでこの職場が嫌いじゃない、何なら好ましく思つてすらいる。仕事が多ければ余計な人に会うことも減るし、給料はしっかり出ているので無駄遣いも出来る。それに、

「今日も仕事は10時まで確定ね、よく眠れそうだね」
意識が消えるほどの眠りならあの夢を見なくて済む。

通達

コロナウイルスの世界的な流行の為、事業継続が困難な状況になりました。つきまして誠に勝手ながら当社は

事業を終了することにいたします。失業手当の為の退職
証明書がほしい方は一週間以内に事務にて手続きをお願い
いたします。

ハーメルン競取り商事

「嘘でしょ」

収入減が無くなったのはどうでもよい。仕事ばかりしてたおかげで貯金は4桁万円
ある。

「明日からどうやって眠ればいいのよ……」

この状況で病院に行つて薬を貰うのは憚れる。外出もできないしどうやって疲れれ
ばいいのだ。

取りあえず映画を借りて見ることにした。数少ない常識的な友人に何回も見れる映
画は無いかとアドバイスを求めたものだ。一日中見ていればそれなりに疲れるだろう。

「まさか全部同じ監督とは思わなかったけど。そんなにスゴイのこのアニメ監督」

絵が綺麗だの、甘酸っぱいだの、共感しかないあの言っていたが本当だろうか。

順番は気にしなくてもよいと言っていたが、ここはひとまず一番古い作品から見ても
よう。

あつという間に25分が過ぎた。友人の目は確かだったようだ。

「後でラインでも送るか、疑って悪かったわ」

飲もうと思って空けたビールはとくに仕事を放棄してぬるくなっていた。

「――糞マズい。しかし、ガラケーでも宇宙にメール出来るのね、意外」

これは次も期待できるな、アイツもこれが一番好きだって言ってたし。

「やべえなこの監督、ええ話や。雪と桜の花びらとかどうやって思いつくんだよ」

○海○時代の漫画にあったような気がするが忘れた。字面似てるし一緒一緒。

またぬるいビールを生産してしまったが捨てた。映画のお供はやっぱりコーラだお前じゃない。

「そうなると次はどうするかな」

ここまで良作続きだと自分の感性で次の映画は選んでみたい。

「ダメだ違いが判らん、売り上げが高いのにしよう」

美しい映像だった、でも開始20分もしない内に私の心はそれどころじゃなくなつた。

「夢の中で入れ替わる……あの夢は誰かの人生で……私以外にも居るかもしれない」

映画のようなロマンチックな話じゃないけど、私は変わった夢、いや悪夢を見る。夢の中で私はいつも小さな女の子で、顔は見えないが多分母親であろう人物に手を引かれている。多少の違いはあるけれど最後に必ず——人が死ぬ。

映画のなかで入れ替わった男女は、時間のずれを利用して世界を変える。

「変えられるの？あの夢を」

考えたこともなかった、早く終われと願うばかりで自分の意思が及ぶなんてちつとも頭をよぎらなかった。

「試してみるか……」

幸いと言うべきかたいして身体は疲れていない、まだ昼過ぎだがこのまま眠ればあの夢を見る。

「おやすみなさい」

布団に俯せた私は間もなく夢に誘われた。

「梶原、この荷物お前の担当だろ！さっさと持ってけ」

「……ああホントだ。すんません最上さん」

「コロナの所為で仕事が増えて疲れるのは分かるけどよお、だからって手え抜かれちゃ

困るぜ。悩みがあるなら今度聞くからよ」

「いえ大丈夫です。疲れて気抜けてました」

言っても信じるわけないし、解決も出来るわけない。

「早く終息しねえかなコロナ。有給がしつかりとれる良い会社だったんだけどなあ」

それなりに仕事には慣れて来たが流石にか疲れがたまる。それに死ぬほど疲れたときは決まってあの夢を見る。

「何でよりによってトラックで人を轢く夢なんだよ」

せめてもの抵抗で早く仕事を終わらせてしまおうと、力強くアクセルを踏み込み配送の仕事始めた。

「△」f、..。.;。ベタッー#」

何と言っているのかは分からないが私に話しかける声がする。

（あの夢だ……いつものあのんだ）

見るのは正月ぶりだろうか、我ながら驚きの社畜ぶりだ。

（今はそんなこと考えている場合じゃないか）

あたしが道路に飛び出しさえしなければこの夢の結末は変えられるはず。

「声が出せない、喉が張り付いたみたいに動かせない」

私に聞こえないだけじゃないかと思ひ隣の、多分母に当たる人物を見上げるが変化はない。

（ん？見上げる？）

私は辺りをキョロキョロ見渡す。

（動けるじゃん。普通に）

試しに歩いているのをスキップに変えてみる。

（出来るな。今までそんなことがなかったのに）

小学生5年生の頃から悩まされていた悪夢がこんなに簡単に解決するとは思ってもしなかった。

（だったら道路に近づかなきゃ、いや動かなければ良いのか。その間にトラックが通過すれば解決する）

私はその場に立ち止まる、母親（仮）がなにかいつているが聞き取れない。

「結局家に着くのは12時過ぎかよ」

仕事と収入がなくなっている人には申し訳ないが、こうも忙しいと今日の疲れを癒す前に次の仕事が来てしまう。

「シャワーだけ浴びて寝るか」

飯はコンビニで済ましてきた、人を轢く夢を見る可能性があらうとも眠らないことは疲れはとれない。

「たまにはビール景気づけでも……いや、よそう。正夢になるといけねえ」

下らないこと言っていないでさつきと寝るか。ベットに横になり天井を見上げていると次第に意識が薄れていった。

3分ぐらい経っただろうか、母親（仮）は説得を諦めて横に座り込んだ。

（しかしトラック来ないな、いつもはすぐに轢きに来るのに）

自分の命を狙う存在を待ちわびるのはなんとも良く分からない感覚だがこちらにも生活がかかっている。

十分経過、二十分経過、三十分経過……、———遅い、遅すぎる。

（待ち合わせしてるわけじゃないんだから早く来れば———）

嫌な予感がした、恐らくそれは当たっているだろう。合っているかどうかを確かめる

には後ろを振り向けば事が済む。だがそれをこの身体は許さない。

(前に進む以外は許されないのね)

さっきのスキップは偶然だった、この夢のなかに入った時点ではほぼ全ての事象は確定していた。

(せめて此処が何処か分かるヒントが)

しかし、見えるのはなんの変哲もない道路と公園のみ。

(電柱はすぐ後ろにあるけど見えない、次の電柱はまだ先)

かなり薄い希望だかどうせ前にしか進めないのだ、四の五の言っている場合ではない。

(それに、私が死なない限りこの夢から出られないみたいだし。現実の方からどうにかするしかなさそうね)

ここまで来れば開き直りだ、覚悟をきめて言葉の通り突っ走る。

(あともうチョツとで……)

あと一歩で住所が見える所でいお決まりのつものが始まった。

視界の隅に風船が映ると、私の身体は写真で撮られたみたいに静止した。

(ああ、もうダメだ)

さっきまでの全力ダッシュなど無かったかのように、言うことを聞かない体はふらふ

らと風船を追いかけて車道に飛び出し、
ヴァギオ

さつきまで音すらしなかったトラックに轢かれそうになり顔も名前も知らない男性に助けられた。何度見たかわからない鉄屑と肉塊の混ぜ物が目の前に出来上がったとき、私は布団から起き上がった。